

信大病院が市民向け講演会

心臓血管治療の最新技術学ぶ

米・ベイラー医大の能勢教授が講演

信大医学部附属病院 病に関する質問に答え「先端心臓血管病センタ

IWG」は2日、市民公 米国人工心臓開発計画

開講座「心臓血管病の未 来を拓く」を松本市内で開いた。米・ベイラー医科学外科学講座教授の能勢之彦氏が特別講演したほか、池田宇一・循環器内科、天野純・心臓血管外科の両教授、勝山努病院長らが、参加した市民約150人の心臓血管

病に関する質問に答えた写真。

米国人工心臓開発計画

に40年余り携わってきた能勢氏は、拍動しない定常流ポンプを使用した人工心臓の有用性を強調。研究成果である長期埋め込み型両心バイパス人工心臓が、来年から欧州で臨床使用を開始すると報告した。また、「これからの人工心臓は臓器再生



までのつなぎの役割がメインになる」とし、再生医療に取り組む信大の先端心臓血管病センターへの期待感を表明した。

HGF治療の第1例を施行

信大病院は、循環器領

域の先端医療を実施する拠点として、「先端心臓血管病センター」の設置準備を進めている。すでに西8階病棟に48床を確保。年度内に再整備を行う救急部にはCCU3床を整備する予定だ。

同院の先端再生治療ではすでに、自己骨髄細胞移植による四肢の血管再生療法が6例となったほか、9月下旬には、閉塞性動脈硬化症に対する遺伝子治療の治験の第1例目を施行した。既存の治療が無効な患者に対し、肝細胞増殖因子(HGF)

を作る遺伝子を虚血部に筋注、血管を新生するもので、今後数年間に4人に試行する予定だ。

同院では今後、再生医療と人工心臓を外科手術と並ぶ心不全治療の選択肢にする意向で、非拍動型の埋め込み型補助人工心臓による治療も視野に入れている。天野教授は「これまで心臓移植が必須とされてきた患者に対し、いかに心臓移植施設とも連携し、長野県の重症心不全に対する治療システムを構築していくかが課題」と話している。